

平成二十三年十月

長崎くんち今年のみどり(その二十四)

越中 哲也

「長崎くんち」の初は長崎奉行所の正史「長崎實録大成」に次のように記してある。

寛永十二年(一六三四)九月七日、惣町より二拾一町先供と諸芸をなす。午刻神輿御旅所に渡御……九日は拾町先供相勤む、午刻神輿還御・湯立・神楽・流鏝馬等あり。

十二日 神前にて能これ有り

当時の諏訪社は現在の松森神社の地にあった。諏訪社が現在の地に移ったのは慶安三年(一六五〇)十一月九日であり、当時は神佛混淆の時代であったので梵鐘が寄進され境内に鐘樓が建てられている。

当時の諏訪社は諏訪・住吉の二社を主神としていたので「お上り・お下り」の神輿は二台であったが、宝永三年(一七〇五)よりは森崎社の神輿も新調し、以来、現在のような三体の神輿の行列になっている。

次に長崎實録大成続編に次の文がある。

寛政五年(一七九三)・当年より九月七日・八日・九日に奉仕してきた「長崎くんち」を浚明院様の御日柄により九月十一日より十三日まで奉納する願、免許有之

浚明院とは徳川十代将軍家治のことである。家治が没したのは天明六年(一七八六)九月八日であり、寛政四年九月七日は家治公七回忌連夜に相当する



明治初期の大黒町傘鉾図

るので以後の「長崎くんち」は九月八日をさけ九月十一日より十三日と変更されている。然し明治元年となり、長崎奉行所が廃止され、同年二月五日には総督(後の県令)澤主水正宣嘉が来任、諏訪社祭礼は旧に復し九月七日・九日とする旨の申し渡しが

あった。この時の布達書には華麗なる長崎くんち奉納踊・傘鉾廃止の事、神輿に従うもの武者行列三十五人等々とある。

然し明治八年県令宮川県令(知事)の時、「長崎くんち」は新暦の十月七・八・九日に改め、奉納踊も「今年より質素を旨として旧例のように復活」と記してある。明治十年には西南戦争、悪疫流行等により「くんち」を十二月十七・十八・十九日に延期している。

二.

戦後における「長崎くんち」は、昭和二十年・終戦の年の十月七日、丸山花月の本田寅之助氏の強行推進によって奉納踊が奉納されている。棧敷はなかったが長坂は一ぱいであった。傘鉾・シャギリはなく踊り子六人、地方衆五人で、踊は手古舞の奉納であった。御神輿の「お下り」「お上り」はなかった。翌昭和二十一年十月九日「長崎くんち」があり、寄合町の傘鉾と同町の本踊を先頭に踊町合同で本踊り二つがあり、東古川町の川船の奉納があった。

今年の「長崎くんち・奉納踊」の事について、私は「ながさきの空・第三集」(平成三年刊)ならびに「ながさきの空・第十集」(平成十年刊)に集録しているので御参考にして戴くとよいが、今回も其の概要について少し記述させて戴くことにした。

尚、第三集・第十集を、お読みになりたい方は本会事務局丹田まで御連絡下さい。(電〇九五八二二五四〇)(FAX〇九五八三二二六七四)

今年の奉納踊六ヶ町

○紺屋町 江戸時代までは長崎の町には本紺屋町・中紺屋町・今紺屋町の三ヶ町があり、長崎の紺屋(染物)は唐船より輸入される白糸・染料を使用し模様にも異国風の物があり「トウジンクウヤ」と俗称され有名であった。当時は中島川の川水を使用し、三ヶ町の紺屋町ができるほど長崎の紺屋さんは繁

昌していた。戦後の紺屋町は、今・中の両紺屋町を中心に「紺屋町」が編成され奉納踊に参加された。傘鉾は秋の諏訪社の大祭に雅楽の調べを奉納する意を込めて紅葉二株の許に冠台を置き、楽人の馬兜と笠を幽雅に配している。奉納踊は町内におられる伝統の踊師匠、藤間金彌先生が町内子供連中を先引に加えられ、賑やかに本踊を奉納されるとお聞きしている。

○出島町 江戸時代の出島内には日本人の居住は許されなかったため、奉納踊には参加していなかった。明治時代となり次第に日本人が住むようになり、初めて出島町が奉納踊に参加したのは昭和二十八年の宮日からであった。勿論当時は伝統の傘鉾も奉納踊もなかったため中山文孝先生に相談され、出島と言えばオランダ屋敷だからと言うので、オランダ渡りの品々を傘鉾に飾りオランダ船を引き物にカピタン行列・オランダ万才の踊を奉納した。

○東古川町 江戸時代初期、中島川と鹿解川の間を開けた古川地区は大町であったので、寛文大火(一六六三)以後、町を本・東・西の三つに分け「くんち」の奉納踊に参加することになった。現在も東古川町には天満宮があり、このお社の鳥居に「寛永十八年二月建 川副町」と刻してあるので東古川町の旧町名は川副町であったと言われる。「本町の奉納踊のだし物は全て町名に因んだ傘鉾と川船ですから良く見て下さい」と町内の人達は言われる。

○小川町 町内には立山より流れ下る小川があり、昔、対岸の船津(町)の海岸に碇泊した人達の用水の全てを、此の町の小川の水に頼っていたので町は繁昌し、町名も小川町と名づけたそうである。

平成十年十月当時の中山正町内会長と毛利利明氏より「今年は六十三年ぶりに『くんちの奉納踊』に参加するので加勢して下さい」との事であった。そして「本年までは傘鉾の新調は間にあいませんが、次の平成十七年の踊町の時には昔と同じ型の傘鉾を新調します」とも言われた。私には実になつかしい小川町の傘鉾と獅子舞である。

○本古川町 本古川町と言えば戦前の長崎の人達は江戸町の兵隊さん、本古川町の軍艦を思い出す。然し戦後は軍艦を出すわけにゆかず、古川町も中山文孝先生に相談し、江戸時代・長崎警備のため入港してきた藩の御座船を主軸に、風雅な「御座船」を奉納される事になった。

傘鉾はフルカワの町名に因んで「古い皮」を使用した太鼓・鼓に横笛と雅楽器を、榊の下に白木八ツ足の台を置き、台の上には楽人の冠を配した実に幽雅な傘鉾である。

○大黒町 明治三十三年長崎市は「港内の海底に泥土が堆積し干潮時には

船舶の全てが不便をきたす」ので、港湾改良の大工事を開始している。この工事により大黒町・樺島町・旧出島オランダ屋敷、前面の全ての海域は埋地となり、其処に中ノ島・長崎駅・大波止・千馬町・出島岸壁等がつくられた。

その昔、大黒町の前面は、長崎港最奥の船着場であり、毎年春一番の風に乗って入港してくる唐船の一番船は、大黒町の海岸より碇を入れた。其の故に、この町の奉納踊は唐人船であり、傘鉾は町名に因んだ陰大黒の趣向があり昔より有名である。

○樺島町 前述のように昔は此の町前面も海岸であり其処には上方方面より商品を積み込んだ船が多く着いていた。中でも大阪・堺方面よりの船は多く、其の船頭衆が町の人達に教えた「堺だんじり・太鼓山」がコッコデショの始めで、寛政十一年(一七九九)奉納とある。シーボルトの名著『Nippon』の挿絵にもコッコデショの図が用いられている。

傘鉾は、同町の乙名若杉氏が神輿行列に使用する猿田彦の面を寄進したことにより「松の木の下に猿田彦の面」をかけて町の誇としていた。

(参考)

毎年「長崎くんち」の解説書として、山下寛一氏の「呂紅」より「長崎くんち」が刊行されているので御よみ戴くとよい。(電八三二〇二六〇)

風信

○何はともあれ今月は、新しい野田総理大臣のもと、第一歩を踏み出されたのであり、私達も明るい社会の開進に協力してゆかねばならぬと考えている。

○長崎では「孫文と梅屋庄吉」を大きく取りあげておられるが、当時の長崎では革新的な思想を鼓舞した鈴木天眼を主軸にした「東洋日之出社」の人達も、大いに孫文の思想に協力した実績があった事も忘れてはならない。

○九月三日は本木昌造先生百三十六回忌であり、恒例により長崎印刷工業組合主催で本木先生の遺徳を偲ぶ供養の会が菩提寺大光寺で行われた。

本木先生は印刷業開発の為のみでなく、我が国近代文化発展の上にも大いなる貢献を残されている事を忘れてはならない。

○九月十二日は中秋の名月である。中秋とは旧暦では七・八・九月を秋と言い、旧八月十五日の月を一年中で一番美しい名月と言う。

長崎の名月は蜀山人太田南畝の「ヒコサン山・名月の句」で全国的に有名であり諏訪公園には月見茶屋もある。

